

中期目標・中期計画（素案）

国立大学法人

奈良先端科学技術大学院大学

平成21年6月25日

中期目標	中期計画
<p>(前文) 大学の基本的な目標</p> <p>○使命</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学は、世界に認知された教育研究拠点として、世界に開かれた教育研究環境の下で、次代に貢献する最先端の科学技術研究を推進するとともに、その成果に基づく高度な教育により人材を養成し、もって科学技術の進歩と持続的で健全な社会の形成に貢献することを使命とする。そのため、学部を持たない大学院大学に要請されている、従来の教育研究の枠組みにとらわれない機動的な教育研究活動を展開する。 <p>○基本的目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ その使命を果たすため、本学の基本的な目標を以下のように定める。 <ol style="list-style-type: none"> 1. 基盤的かつ社会との関わりの深い学問領域「情報科学」、「バイオサイエンス」及び「物質創成科学」の深化・拡大を図るとともに、3研究科の連携の下、次代を先取りする学際・融合領域を新たに開拓し、世界をリードする研究活動を展開する。 2. 持続的で健全な社会の形成のために要請 	

<p>される課題に積極的に取り組み、次代の社会を創造する研究成果を創出する。</p> <p>3. 日本全国からの多様な学生に加えて、世界から積極的に学生を受け入れ、最先端の研究成果を取り入れた教育プログラムと世界水準の研究活動を通じて、科学技術の高度化と活用のために国際社会で活躍する人材を養成する。</p> <p>4. 研究成果を世界に発信することにより、知の創造に貢献するとともに、研究成果の社会的展開により、イノベーションの創出を図り、持続的で健全な社会の形成に資する。</p> <p>5. 学長のリーダーシップのもと、構成員が本学の使命・目標を共有し、戦略的な大学経営・運営を行う。</p>	
<p>◆ 中期目標の期間及び教育研究組織</p>	
<p>1 中期目標の期間</p> <p>第2期中期目標の期間は、平成 22 年 4 月 1 日から平成 28 年 3 月 31 日までの 6 年間とする。</p>	
<p>2 教育研究組織</p> <p>この中期目標を達成するため、別表に記載する研究科を置く。</p>	
<p>I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標</p>	<p>I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置</p>
<p>1 教育に関する目標</p>	<p>1 教育に関する目標を達成するための措置</p>

<p>(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標</p> <p>○教育の成果</p> <p>1. 世界水準の研究成果を背景に、柔軟かつ多様性に富んだ教育環境の下で、国内外で高い志を持って科学技術の進歩に挑戦する人材、及び高度な科学技術の活用や普及により社会・経済を支える人材を養成する。</p> <p>○アドミッションポリシー</p> <p>2. アドミッションポリシーとして、国内外を問わず、また大学での専攻にとらわれず、高い基礎学力を持った、学生あるいは社会で活躍中の研究者・技術者など、将来に対する明確な目標と志を持った者を積極的に受け入れる。</p> <p>○教育課程・教育方法</p> <p>3. 養成しようとする人材像を教職員が共有しつつ、体系的な授業カリキュラムと組織が責任を持つ研究指導からなる教育課程を編成し、様々な教育方法を活用した教育プログラムを実施する。特に、博士後期課程の学生に対しては、世界水準の研究を遂行できる能力を養成する教育を実施する。</p>	<p>(1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための措置</p> <p>○教育の成果</p> <p>1) 博士前期課程では、国内外の教育研究機関・企業等において先端科学技術に関する研究あるいはその活用・普及に従事する人材を養成する。</p> <p>2) 博士後期課程では、自立して研究が遂行でき、国際的な場で主導的な役割を果たすことができる科学技術研究者を養成する。</p> <p>○アドミッションポリシーに基づいた学生受け入れ</p> <p>3) 本学における教育の目的・目標、教育方針、アドミッションポリシーを、国内外に多様な方法で発信し、アドミッションポリシーに沿って入学者を選抜する多様な制度を整備する。また、秋季入学制度により留学生・社会人の積極的な受け入れを促進する。</p> <p>○教育課程・教育方法</p> <p>4) 博士前期課程では、社会人を含む多様な入学者に対して、専攻分野に関する高度の専門的知識・研究能力と関連する分野の基礎的知識に加え、研究者・技術者としての倫理性、グローバル化した社会で活躍できるコミュニケーション能力、論理的思考力に基づく問題解決能力を養成するため、体系的できめ細かな教育プログラムを実施する。</p> <p>5) 博士後期課程では、国際的な教育研究環境の下で、自立して高度な研究活動を遂行できる問題発見解決能力を養成するため、世界水準の研究活動に主体性を持って参加させる。また、国際社会で主導的に活躍できる能力を養成するプログラムを実施する。</p> <p>6) 広い視野、総合的な判断力を養成するために、各研究科が連携して、横断的な授業カリキュラムを編成・提供する。また、最先端の研究成果を常に教育に取り入れるとともに、学際・融合</p>
---	--

<p>○教育のグローバル化</p> <p>4. 世界に開かれた大学院として、世界から優秀な学生を受け入れ、また学生を世界に派遣するなど、国際的な教育環境の下、教育のグローバル化を促進する。</p> <p>○成績評価（学位授与）</p> <p>5. 成績評価及び学位審査基準を学生に示し、それに従った評価を行うことにより、学位授与までの教育のプロセス管理の透明化を図る。また、標準修業年限内の学位授与を促進する。</p>	<p>領域や新たに社会的に要請される分野に参加する人材を養成するための取り組みを行う等、先端科学技術大学院大学にふさわしい教育を行う。</p> <p>7) 情報機器を活用した教育と学習支援、研究科間の学生交流や地域での活動によるコミュニケーション能力の養成、多様なニーズに対応する他教育研究機関・企業と連携した教育等、様々な教育方法を活用する。</p> <p>8) 異なる専門分野の教員を含む複数指導教員制の下、学生を研究に参加させ、複眼的視点で研究指導を行う。</p> <p>9) 博士前期課程学生に加えて博士後期課程学生も対象とし、社会の多様な場で活躍するために必要とする知識と能力を高めるためのキャリア教育を入学時から段階的に行う。</p> <p>○教育のグローバル化</p> <p>10) 全学生の10%、博士後期課程学生については20%を目標として留学生の受け入れを推進する。さらに、英語のみによる学位取得が可能な英語コースを整備する。</p> <p>11) 海外の研究者を教員等として積極的に招へいするとともに、海外諸国の主要な交流協定締結機関と連携した教育プログラム等を整備する。</p> <p>12) 日本人学生の国際性の涵養や学生の自立性を伸ばすために、英語教育の充実、海外国際学会での発表の支援等を行うとともに、海外への留学を積極的に推進する。また、留学生等を対象とした日本語教育及び日本の文化・歴史の理解に資する取り組みを行う。</p> <p>○成績評価（学位授与）</p> <p>13) 課程において身につけさせる知識・能力とその教育方法、各授業科目等の教育目標・成績評価基準、学位論文の審査基準を学生に示し、適確な成績評価、学位審査を行う。</p> <p>14) 複数指導教員により、各学生の学修及び研究の進捗状況の定期的な評価及び助言を行い、学位授与までの教育のプロセス管理の透明化を図り、標準修業年限内の学位授与を促進する。</p>
<p>(2) 教育の実施体制等に関する目標</p> <p>6. 大学院教育の実質化とグローバル化を推進</p>	<p>(2) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置</p> <p>15) 全学教育委員会を中心として組織的に大学院教育の実質化とグローバル化を推進する。特に、</p>

<p>するための全学的なマネジメント体制を構築し、適切な教員配置と教育環境の整備を進め、常に教育の質の向上を図る。</p>	<p>教育のグローバル化については、新たに設置する国際連携推進本部（仮称）の企画立案を受けて、全学教育委員会がより実地的な企画推進を担う体制をとる。</p> <p>16) 日本人教員の適切な配置に加えて、外国人教員の積極的な採用にさらに取り組み、また、外国人研究者の特任教員等としての招へいにより、教育のグローバル化を推進する。</p> <p>17) インフラとしての情報環境システムとともに電子図書館システムの継続的な充実を進め、学生が学内・学外の多様な学術情報に常時アクセスできる環境を維持・向上させる。また、英語学習システム、授業アーカイブ、授業情報通知システム等の学習支援のための情報環境整備を推進する。</p> <p>18) 教員の英語による教育能力の向上を含めたFD活動、事務スタッフの国際能力の向上を含めたSD活動を推進する。</p> <p>19) 学生、教員、学外有識者、就職先等、多様な視点からの教育評価を組織的に行い、その評価結果を全学的にフィードバックし、教育の質の向上を進める。</p>
<p>(3) 学生への支援に関する目標</p> <p>7. 留学生を含む多様な学生について、その修学・学生生活、さらに、将来設計の形成の支援に組織的にきめ細かく取り組む。特に、グローバルな教育環境の下で世界をリードする研究者を養成するために、博士後期課程学生、留学生に対する支援制度を充実させる。また、修了生とのネットワークを拡充し、そのキャリアアップを支援するとともに、大学運営及び在学生の将来設計形成・就職支援等に活用する。</p>	<p>(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置</p> <p>20) 学生の受け入れから修学・学生生活、将来設計の形成、さらに、修了後のキャリアアップの支援を行う。</p> <p>21) 学生の心身の健康維持のため、健康教育、健康診断を定期的を実施するとともに、きめ細かなカウンセリング体制を維持し、その質の向上に取り組む。</p> <p>22) 博士後期課程学生と留学生への経済的支援の基本ポリシーを定め、大学独自の支援策を含め、支援制度を充実させる。また、留学生を含む学生の各種奨学金の受給促進に、全学的視点から取り組む。</p> <p>23) 各種相談窓口、修了生アンケート等に加えて、役員と学生の対話の機会など、学生ニーズの把握のためのシステムを充実させるとともに、その情報を集約し、教育環境、生活環境の改善を行う。</p> <p>24) NAIST ネット（終身メールアドレスシステム）も活用して、留学生を含む修了生と大学（在生を含む）とのネットワークを拡充し、大学運営の改善、在学生の将来設計形成・就職支援に活用する。また、修了生に、最先端の研究動向を学ぶ機会を提供するなど、修了生のキャリ</p>

	アアップに取り組む。
2 研究に関する目標	2 研究に関する目標を達成するための措置
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標	(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置
8. 世界をリードする最先端の研究を推進し、その成果を世界へ発信することにより、知の創造に貢献するとともに、研究成果の社会的展開にも積極的に取り組み、イノベーションの創出を図り、持続的で健全な社会の形成に貢献する。	25) 「情報科学」、「バイオサイエンス」及び「物質創成科学」の各分野における世界トップクラスの研究活動を展開し、また、学際・融合領域研究への組織的な取り組みにより、次代を先取りする新たな研究領域を開拓する。 26) 環境・食糧・エネルギー・資源問題など社会的に要請される諸課題や、高度情報化社会の進展に伴い発生する諸問題等の解決に貢献する研究に積極的に取り組む。 27) 最先端の研究成果を世界に発信し、人類の財産として蓄積する。また、大学の研究成果を社会に還元するために、組織的に産官学連携等を推進する。
(2) 研究実施体制等に関する目標	(2) 研究実施体制等に関する目標を達成するための措置
9. 新たな研究領域を開拓しつつ、世界をリードする研究を推進するためのマネジメント体制を整備し、国内外から優れた研究者を獲得し、その能力を発揮できるシステムを構築する。そして、常に研究の質の向上を進め、世界に認知された教育研究拠点としての地位を確立する。	28) 先端科学技術研究調査センターを中心に国内外の研究動向調査と現在及び将来の社会的要請に応えるための研究展開方向の検討、大学の研究活動の検証を行い、総合企画会議において研究戦略を策定する。 29) 大学としての研究戦略の下で、常設の教員選考会議により、国内外から優秀な人材を求め、戦略的な教員の配置を行う。さらに、学長直轄の教員ポストを設け、全学的視点から、学際・融合領域の開拓のために、大胆な教員・研究者の配置を行う。 30) 若手研究者が最大限に能力を発揮し、評価されるシステムとして、テニュアトラック制等を導入するとともに、少なくとも年3名の助教等の若手研究者に長期在外研究の機会を与え、国際的競争力を向上させるためのプログラムを実施する。また、ポスドク等の研究員についても、そのキャリアアップを支援する。 31) 総合研究実験棟の活用や研究費の支援などにより、卓越した研究者及び学際・融合領域の研究を積極的に支援できる体制を構築する。 32) 革新的な研究分野や新たなイノベーションの創出に向け、先端融合分野の研究を推進するため、研究科を越えた異分野の研究者の交流を促進する。

	<p>33) 最先端研究に必要な研究機器及び情報環境システムを計画的に整備するとともに、研究機器の革新にも迅速に対応し、常に最先端の研究環境を実現する。また、このための技術的支援スタッフを充実させ、その能力の向上を進める。</p> <p>34) 研究成果の発信に加え、海外の教育研究機関との共同研究や組織的連携の推進、また、国際会議の積極的な開催等の取り組みを通じて、世界に認知された教育研究拠点としての地位を確立する。</p>
3 その他の目標	3 その他の目標を達成するための措置
<p>(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標</p> <p>10. 産官学連携を推進し、大学の研究成果を社会に還元するとともに、地域社会と連携した教育サービス等を通じて、地域の誇りとなる世界的な教育研究拠点となる。</p>	<p>(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標を達成するための措置</p> <p>35) 産官学連携による人材養成と研究活動を展開し、先端科学技術の活用による社会の発展に寄与するとともに、組織的に大学の研究成果・シーズを社会に還元する。</p> <p>36) けいはんな学研都市における中核機関として、自治体、近隣の企業及び大学等と連携した活動を行う。また、地域社会と連携して、一般市民や小・中・高校生などを対象とした、科学技術に関する興味を育むための教育サービスを実施する。</p>
<p>(2) 大学運営の国際化に関する目標</p> <p>11. 教育研究のグローバル化推進のため、世界に開かれた教育研究拠点にふさわしい運営体制を実現し、諸外国の教育研究機関との組織的な連携を推進する。</p>	<p>(2) 大学運営の国際化に関する目標を達成するための措置</p> <p>37) 国際連携推進本部（仮称）を設置し、教育研究のグローバル化に関する企画立案を行うとともに、海外の教育研究機関との組織的連携の企画立案等、教育研究のグローバル化推進のために求められる大学運営の国際化の推進にあたる。</p> <p>38) 海外諸国の主要な教育研究機関と交流協定を締結し、教育研究の連携を推進するとともに、海外での活動の拠点を構築する。また、国際的な教育研究機関のネットワークに積極的に参加する。</p> <p>39) 英語によるキャンパスライフを可能にするため、学内文書の英語化や教職員の英語能力向上のための取り組みを行うとともに、事務手続きについても、外国人学生・外国人研究者の利便性を高める。</p>
II 業務運営の改善及び効率化に関する目標	II 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置
1 組織運営の改善に関する目標	1 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

<p>○戦略的な大学経営・運営</p> <p>12. 大学の使命及び中期目標達成に向け、学長のリーダーシップのもと、先端科学技術分野に特化した大学院大学として、機動的かつ戦略的な大学経営・運営を行う。</p> <p>○教職協働体制の確立</p> <p>13. 構成員が本学の使命・目標を共有し、一体となった大学運営を行うために、教職協働体制を確立する。</p> <p>○運営体制・大学経営の改善</p> <p>14. 教育研究のより一層の活性化及び運営体制の質の向上のため、人事制度の改善、監査機能の充実を進める。また、大学経営に学外の意見を反映させる。</p>	<p>○戦略的な大学経営・運営</p> <p>40) 総合企画会議において機動的かつ戦略的な大学経営・運営の検討を行う。そのため、企画室及び必要な課題に応じたプロジェクトチームを設置する。</p> <p>41) 教育研究に関する目標を達成するために、従来の体制にとらわれず見直しを行い、柔軟かつ機動的な教育研究組織を編成する。また、運営組織の在り方も不断に見直し、適確な改革を行う。</p> <p>42) 財務、人事、施設・設備に係る中長期的な計画を策定し、戦略的な学内資源配分を行う。</p> <p>43) 教育研究の成果を社会へ向けて積極的にアピールし、世界水準の教育研究拠点としての大学の知名度及び存在感の向上を図るために、戦略的な広報活動を行う。</p> <p>○教職協働体制の確立</p> <p>44) 法人運営に関する諸情報の周知を図り、大学の方針に対する構成員の共通理解を進め、教職員の大学運営への積極的な参加を促進する。</p> <p>45) 教職員の実務及び企画立案能力を高めるための取り組みを積極的に行い、原則として各種委員会に教員及び職員の双方を配置するとともに、横断的な取り組みが必要なテーマについては、プロジェクトチームにより機動的に取り組む。</p> <p>○運営体制・大学経営の改善</p> <p>46) 教員のテニユアトラック制の導入や職員の採用方法及び能力養成プログラムの改善等、人事制度の改善を検討・実施する。</p> <p>47) 教職員の業務実績の評価方法を改善し、それを対象者に示すとともに、評価結果を処遇に反映させる。</p> <p>48) 独立した内部監査体制の下、大学運営にかかる業務の遂行についての適法性・効率性の評価及び内部統制の評価を行い、運営に反映させる。</p> <p>49) 監事の職務遂行を補助する体制の整備や内部監査部門との連携等、監事の監査環境をさらに整備し、監査結果を適切に運営に反映させる。</p>
---	--

	50) 学外委員への情報提供を充実させるなど、経営協議会の運営を一層改善し、その意見を大学経営に反映させる。
2 事務等の効率化・合理化に関する目標 15. 教育研究活動を効率良くサポートし、かつ事務処理の更なる効率化・合理化を進めるために、恒常的に事務処理システムと事務組織の在り方を見直す。	2 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置 51) 更なるITの活用、ペーパーレス化や適切なアウトソーシング等により、教育研究支援機能の強化を図りつつ、事務処理の効率化・合理化を組織的な取り組みとして推進する。また、業務フローの見直しも行い、必要に応じて事務組織の機能・編成を改善する。
Ⅲ 財務内容の改善に関する目標	Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置
1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の安定的確保に関する目標 16. 将来を見据えた財務運営を進めるとともに、外部資金、科学研究費補助金等の組織的な獲得等、自己収入の安定的確保への取り組みを行う。	1 外部研究資金、寄附金その他の自己収入の安定的確保に関する目標を達成するための措置 52) 教育研究システム改革、重点プロジェクト推進、新研究分野の開拓等のための外部資金の獲得を組織的に進める。 53) 科学研究費補助金等の教員個人の外部研究資金獲得を促進するため、申請書作成の支援・助言等、その支援体制の整備に取り組む。 54) 大学の研究成果としての知的財産の活用により産官学連携を組織的に推進する。
2 経費の抑制に関する目標 17. 「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、平成18年度以降の5年間において国家公務員に準じた人件費削減を行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。	2 経費の抑制に関する目標を達成するための措置 55) 「簡素で効率的な政府を実現するための行政改革の推進に関する法律」(平成18年法律第47号)に基づき、国家公務員に準じた人件費改革に取り組み、平成18年度からの5年間において、△5%以上の人件費削減を行う。更に、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2006」(平成18年7月7日閣議決定)に基づき、国家公務員の改革を踏まえ、人件費改革を平成23年度まで継続する。

18. 業務運営の効率化・合理化を行い、経費の削減を行う。	56) 契約における競争性・透明性の確保、管理業務の簡素・合理化等を図り、経費の削減を推進する。
IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標	IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置
1 評価の充実に関する目標	1 評価の充実に関する目標を達成するための措置
19. 教育研究の質の向上及び大学運営の改善のための自己点検・評価及び外部評価を組織的に行う。	57) 大学の活動状況を効率的に集約するシステムを整備し、多様な視点から評価を実施し、教育研究の質と大学運営機能の向上にフィードバックする。特に教育研究に関しては、海外研究者を含む評価者による評価を実施し、国際的通用性を検証する。
2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標	2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置
20. 公的資金が投入されている国立大学法人として、社会に対する説明責任を果たすため、情報公開・情報発信を進め、経営の透明性を確保する。	58) 経営の透明性を確保するため、国民・社会に対して、自己点検評価結果をはじめ、情報公開・情報発信を推進する。
V その他業務運営に関する重要目標	V その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置
1 施設設備の整備・活用等に関する目標	1 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置
21. 最先端の教育研究に必要な環境を維持するため、戦略的な施設マネジメントを行うとともに、構成員が心身ともに健康で働きやすいキャンパス環境の形成を進める。また、省エネルギー・温室効果ガス排出量削減を進める。	59) 施設マネジメントにより、スペースの有効活用、計画的な施設・設備の保全・改善等、大学施設の経済的かつ適切な管理を進める。 60) キャンパスマスタープランに基づき、生活環境の充実、キャンパス緑化の推進等、キャンパスの快適性を向上させる。 61) 地球環境の保全に貢献するため、省エネルギー・温室効果ガス排出量削減に積極的取り組み、その達成状況を公開する。
2 安全管理及び危機管理に関する目標	2 安全管理及び危機管理に関する目標を達成するための措置
22. 教育研究・職場環境の安全性の確保及び危	62) 全学的な安全管理体制の下、各種安全教育、施設・設備・機器の安全管理、教育研究・職場

<p>機管理のための体制を充実させる。</p>	<p>環境の保全、毒物劇物・放射線同位元素や組み換え生物の管理等を、引き続き法令に従って行う。また、自然災害等を含め、大学の活動における様々な危険性を評価し、それに対する対応策を明確にした危機管理体制を整備する。</p> <p>63) 大学の情報セキュリティポリシーの下、情報及び情報ネットワークの適正な使用、データの確実な保全、不正侵入の防止など、情報セキュリティ対策に恒常的に取り組む。</p>
<p>3 法令遵守に関する目標</p> <p>23. 国立大学法人として、各種法令を遵守した適切な法人運営を行うためのコンプライアンスマネジメントシステムを構築する。</p>	<p>3 法令遵守に関する目標を達成するための措置</p> <p>64) 研究活動上の不正行為やハラスメントの防止、法令遵守に加え、社会的規範・倫理を守った大学運営を行うために、大学運営の透明化と監査機能の充実等、不正防止のための環境の整備を行うとともに、大学で定めた行動規範を全構成員に周知するなど、コンプライアンスマネジメントを充実させる。</p>
<p>4 その他の重要目標</p> <p>24. 男女共同参画を推進する。</p> <p>25. 教職員の心身の健康維持のための体制を向上させる。</p>	<p>4 その他の重要目標を達成するための措置</p> <p>65) 男女共同参画室を中心として、学生・ポスドクを含む女性研究者のキャリア教育、女性研究者・女性職員が活躍できる環境整備、けいはんな地区の女性研究者ネットワーク形成等に取り組み、男女共同参画を推進する。</p> <p>66) 学生のみならず教職員・ポスドク等についても、心身の健康維持のための健康診断とカウンセリング体制を維持し、その質の向上に取り組む。また、構成員の意見を教育研究環境、職場環境の改善に反映させる。</p>

中期目標		中期計画			
別表（研究科）		別表（収容定員）			
研究科	情報科学研究科	平成22年度	情報科学研究科 421人 〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕		
	バイオサイエンス研究科		バイオサイエンス研究科 330人 〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕		
	物質創成科学研究科		物質創成科学研究科 270人 〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕		
研究科	情報科学研究科		平成23年度	情報科学研究科 421人 〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕	
	バイオサイエンス研究科			バイオサイエンス研究科 330人 〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕	
	物質創成科学研究科			物質創成科学研究科 270人 〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕	
研究科	情報科学研究科			平成24年度	情報科学研究科 421人 〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕
	バイオサイエンス研究科				バイオサイエンス研究科 330人 〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕
	物質創成科学研究科				物質創成科学研究科 270人 〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕

平成25年度	情報科学研究科	421人	〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕
	バイオサイエンス研究科	330人	
	物質創成科学研究科	270人	〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕
		〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕	
平成26年度	情報科学研究科	421人	〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕
	バイオサイエンス研究科	330人	
	物質創成科学研究科	270人	〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕
		〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕	
平成27年度	情報科学研究科	421人	〔うち博士前期課程 292人 博士後期課程 129人〕
	バイオサイエンス研究科	330人	
	物質創成科学研究科	270人	〔うち博士前期課程 228人 博士後期課程 102人〕
		〔うち博士前期課程 180人 博士後期課程 90人〕	

